心豊かな世代が育つ童話の里づくり(412)

―シリーズ―　あなたの人権・わたしの人権

『普通』から生まれる問題

くす星翔中学校1年
宿利　悠太

「男だから泣くな」僕はこの言葉に嫌な思い出がある。

小学三年の夏、全校児童の前で発表する機会があった。全校といっても十五人程度で、いつも一緒に遊んでいる。しかし、集会の張りつめた雰囲気と、みんながらの視線に緊張して泣いてしまい、発表は成功とはいかなかった。

その後、泣いたことを笑う人がいた。「お前、男だから泣くなよ。弱虫やな。」と。

本人は軽い気持ちで言ったのだろうが、僕は悲しかった。いや、悲しみより怒りの方が大きかった。「男だから」と言われたからだ。男でも女でも泣く時は泣く。自分の勝手な価値観を押し付けられて本当に腹が立った。

それと同時に、自分の「普通」が周りの人を傷つけてしまう可能性があることにも気が付いた。

今、僕たちが持っていた「普通」が変化しつつある。

そのなかの一つに「性の多様性」がある。

小学校の授業でLGBTという言葉を知った。心と体の性別が一致しない人のことを知った。少し前まで「オネエ」「オカマ」等と呼ばれ、世間から「普通とは違う」と思われていた人たちだ。

その人たちが冷たい視線を浴びていたのは、世の中にLGBTが知られていなかったからだろう。つまり、「普通」の考え方が違っているから人を傷つけてしまうのだと思う。

幸い今は、授業やニュースなどで様々なことを教えてくれる。

人を傷つけないためには、情報を知り考えを深め、固まった「普通」を変化させていくことが大切だと思う。

改めて小学校の時の「男だから泣くな」を考えてみると、これも性による決めつけに関係あることに気付いた。それは、性別によって役割を求めていることだ。

確かに、一般的には男性の方が力は強い。でも中には弱い人もいる。なのに、男だから力強くあって当たり前という見方が問題なのだと思う。

身の回りで、さらにこの問題を考えてみると、やはり仕事は男、家事は女という考えの人や家庭が多いと思う。

地域の行事やお祭りなどでも料理の支度は女性がしている。

昔は、筋力や体力の都合から仕事といえば男性に適したものが多かったのだろう。しかし、今は、様々な仕事があるし、共働きの家庭も増えている。なのに、家事の大半を女性がするのは、日本人に昔の考えが深く根付いていることが原因だと思う。今は、男性も女性も仕事をしているので、家事も平等に分担すべきだと思う。

僕の家は、両親どちらも仕事をしている。父は仕事の関係で毎日家にいるわけではない。母は仕事が終わったらすぐに料理に取りかかる。父も家にいれば料理などの家事はするが、母の方が家事をしている。

僕は小学生の頃より家事をしなくなった。帰宅時間が遅くなったことが関係している。けれども、時間が全くないわけではない。頭では、家事をすべきだとわかっているのに、それが行動に移せていない。そんな自分がとても恥ずかしい。

この人権作文は、そんな僕に訪れたチャンスだと思う。

作文を書いていると、昔からの考えのせいで傷ついた人や、苦労している人のことを深く考えられた。

そして、そんな人たちのために自分が何をすべきなのかも少しずつ分かってきた気がする。僕には、大きな力も発信力もない。だけど、自分にできることからやっていきたい。

他の人に、自分の「普通」を押し付けて嫌な思いをさせている人がいたら、僕は見過ごさない。

大人も子どももどんな性別の人でも心から幸せだと思える社会のために。

この人権作文について、意見や感想、激励など、お寄せください。

また、みなさんの投稿もお待ちしています。

わたしたちをとりまく様々な不合理や差別性について気づいたことや感じたことを一、二〇〇字程度にまとめて、住所、氏名、連絡先電話番号を記入して(匿名も可)、玖珠町教育委員会社会教育課「あなたの人権・わたしの人権」までお届けください。